「郷土の先人に学ぶ第４集」から

厳訓無処罰の教育信念を貫いた人

龍野定一（たつのていいち）

略歴

明治二十二年三月六日
　大島郡徳之島町亀津に生まれる。
明治三十五年三月
　亀津尋常小学校高等科を卒業する。
大正二年三月
　広島高等師範学校を卒業する。
大正十三年八月
　大島中学校校長となり厳訓無処罰の教育を実践する。
昭和二十九年
　文部大臣表彰を受ける。
昭和四十一年
　勲四等瑞宝章を受勲する。
名瀬市名誉市民、徳之島町名誉町民となる。
昭和六十一年一月二十九日
　九十七歳で永眠する。

父と母

龍野定一は、亀津村亀津一二七番地（徳之島町亀津北区の亀津小学校敷地の一部）で、龍前定の長男として、明治二十二年（一八八九年）三月六日に生まれました。龍の一字姓は、のちに龍野に改姓されました。

定一の父は、新しいことにも率先して取り組む、進んだ考えの持ち主でしたが、金銭に無欲で、清貧（行いが清らかで私欲がなく、そのために貧しい生活を送ること）をびくともしないような人でした。そのため家計は楽ではありませんでした。

母めつたかねは、働き者で賢婦（かしこくてしっかりした婦人）と評判で、苦しい家計の中で五人の子を立派に育てました。長男定一と次男隆直を特に大事にし、乳飲み児のときから、二人を寝かせるのは表の間の床の前で、家の人が二人の枕元を通るのをいましめ、「この子らは、国の宝です。」というのが、口ぐせでした。

名校長との出会い

定一は、亀津尋常小学校入学時に、「前田甚助校長に巡り会えたことが、教育者としての生涯を決定づけた。」と述べています。前田甚助校長は、加治木町の出身。県立鹿児島師範学校を卒業して間もなく、選ばれて亀津尋常小学校長に任命された青年校長でした。教育者としての信念に燃え、識見（物事を正しく観察し判断する能力）が高く、若いのに大家の風格を備え、のちに、本県教育界に多くの功績を残しました。

龍野定一の胸像

定一は五歳の時、姉につれられて学校へよく遊びに行きました。その遊んでいるようすを、いつも見ていた前田校長は、定一のかしこさを見ぬき、一年に入学させました。

五歳で一年に入学した定一は、全教

科成績が良く、二年、三年と進級し、九歳で尋常科四年を卒業、高等科へ進みました。

高等科での思い出を、定一は次のように語っています。

「わたしが高等科のとき、同級生の中には結婚している十九歳の青年もいれば、一人前に農業をしている十六、七歳の青年もいました。このような年上の人たちといっしょに勉強しましたが、成績は、いつも首席（一番）でした。しかし、農業科の実習だけは困りました。体の大きい年上の人たちは、肥料桶を実習地までかついで行き、元気良く畑を耕したり、植え付けや草取りをするのに、わたしが肥料桶をかつごうとすると、身長が低いので桶が地面についてかつげない。それで、いつもくわ一つかついで出かけました。また、運動会や遠足でも体力が続かず困ったが、どうにかがんばり通しました。」（亀津小学校九十周年記念式典記録より）

鹿児島県立二中へ進学

定一の鹿児島県立第二中学校への進学は、学資の送金のことで難航（実行するのがむずかしいこと）しました。龍野の本家の人々や、母親の兄弟たちが話し合い、みんなで家計に応じて援助することにしました。

定一は、親たちのはげましに奮起（ふんき）（気力をふるいたたせること）して、二中でも勉強にはげ

み、在学五年間首席で通し、成績の優秀な生徒に贈られる「月謝免除」（授業料をはらわなくてもよいこと）の恩典を受けることができました。

二年後、弟の隆直も入学して来ました。下宿屋のせまい部屋で、二人は一つの机を共同で使い、はげまし合いながら勉強しました。

当時、二中では、外出するときには袴を着用することが、校則で決められていました。しかし、袴は一着しかなく、二人そろって外出することができませんでした。

それでも、二人は、「これで、勉強する時間が余計にとれる。」と貧乏生活を少しも苦にしませんでした。

夏休みに徳之島へ帰るときには、母がいつも亀徳港まで迎えに来てくれました。

定一と弟の隆直が、連れ立って初めて帰島した翌朝、母は二人をえんがわへ呼びました。そして、母は、床下をゆびさして「あれを見てごらん。」と言いました。二人が庭へ出て床下を見ると、つえのような細長い木が束ねられて、床下いっぱいつまっていました。

「わたしが、山へたきぎ取りに行くたびに、一本ずつつえにしてきたのを残してあるんだよ。」と、母が言いました。その母の言葉に、二人は声もなく立ちつくすのでした。その目には涙があふれていました。

当時は、ガスも電気もありません。燃料は「たきぎ」でした。田畑を持たないまずしい農家

の人々が、山からたきぎを切り出し、家々をまわって売り歩くのでした。
その頃、龍野の本家は倒産して、分家の定一の家も生活が苦しくなっていました。しかし、シュウガナシ（村の指導的立場の人）の主婦が、たきぎとりに行くなど考えられないことでした。二人は、（この母の苦労に必ず報いなければならない）と、固く決心するのでした。
しかし、中学時代、ともに苦労した弟隆直は、東京大学法学部を卒業、裁判官、弁護士になりましたが、四十二歳の若さで亡くなってしまいました。

教師の道をめざして

鹿児島二中を卒業した定一は、広島高等師範学校（現広島大学の前身）へ進みました。
広島高師は、当時の中等学校教員の養成学校としては、東の東京高師と並び称せられていました。定一の専攻は国漢科でしたが、剣道にもはげみ剣道教師の免許もとりました。
広島高師での四年間、定一は周囲も驚くほどの勉強家で通しました。友人のだれもが、「定一のやつ、いつ寝るんだろう。」と評判になるほどの勉強ぶりでした。
大正二年（一九一三年）広島高師を卒業した定一は、福岡県立東筑中学校教諭として教師生活の第一歩をふみ出しました。当時、ここは暴れん坊の多いことでも有名な学校で、着任して

すぐ、生徒のカンニング問題、ストライキ騒動が起こって、多くの上級生が退学、転校の処分を受けました。

これを見て定一は、「無処罰無試験」の教育を発意決心しました。そのためには、学校現場で実際に指導している先輩校長に体当りで教えてもらい、体験を積むことが大切だと考えました。そこで、各地の名校長を求めて転任することにしました。

まず、鹿児島第一中学校へ、ついで広島中学校、さらに京都の桃山高等女学校、京都男子師範学校へと転任し、当時の有名校長の指導を受けました。定一の年齢は、まだ三十代半ばにも達していませんでしたが、型破りの青年教師だと評判になりました。

社会教育事業への開眼

大正十一年（一九二二年）、東京市深川の貧しい人々の住んでいる地域改善と教育のために、「善隣館」ができました。型破りの青年教師定一は、望まれて善隣館の館長になりました。教師になって十年目のことでした。当時この地域には、家のない人々や仕事のない人々が集まっていました。定一は、社会から疎外（よそよそしく遠ざけること）されたこれらの人々にこそ、愛情をもって接しなければいけないと考え、根気強く教育していきました。

「この気のどくな人々に生きる勇気を持たせるには、何よりも愛情が大切だ。愛情を持ってくり返しくり返し教え導いていくことが大切だ。」当時、定一は周囲の人々にこのように語っています。

しかし、翌大正十二年九月一日、関東大震災が起こり、東京は焼野が原となり、深川地区一帯もすべて焼けてしまいました。

大島中学校校長となる

定一が鹿児島県知事を初め大島郡の人々の求めに応じて、県立大島中学校（現大島高校）の校長として名瀬に赴任（ふにん）したのは、大正十三年（一九二四年）八月、三十五歳の若さでした。

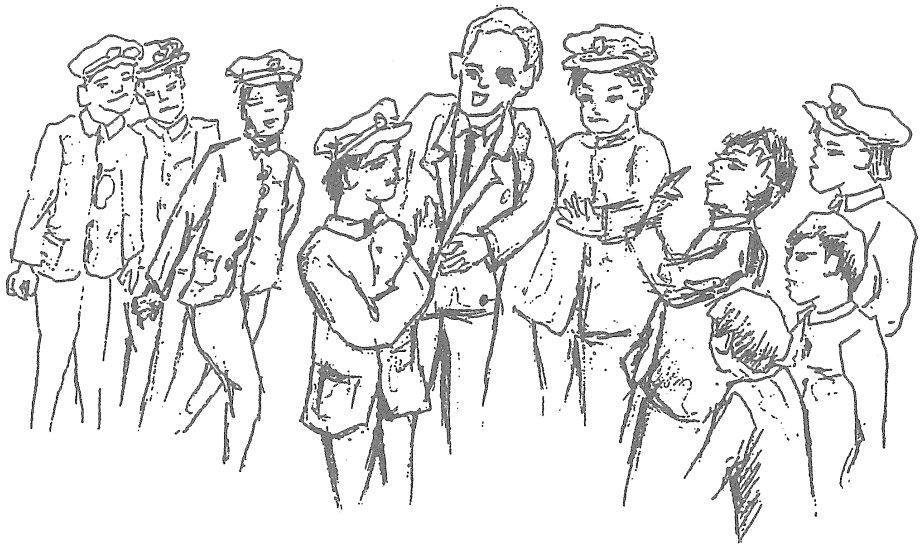
当時の大島中学校は、九州における三大ストライキ校の一つと評され、騒動の多い学校でした。定一が赴任する前の年も、さまざまな事件が起き、多数の生徒が放校、退学等の処分を受けていました。また、生徒の学力も驚くほど低く、一年生の中にはアルファベット二十六文字を満足に書けない者もいました。

定一はこの状況を見て、郷里の後輩たちのため、全力をつくそうと決意しました。

（「厳訓無処罰」の教育信念を実践する好い機会だ。これこそ、天が自分に与えた使命だ。）と

思うのでした。

生徒に告げる三つの約束



生徒の中に入りこんで指導する龍野定一

一、決して処罰はしない

校長は裁判官でもなければ警察官でもない。君らを教え導くだけである。君らがどんなことを言い、どんなことをしてもただ教えるだけで処罰はしない。操行点をつけたり、停学謹慎、退学を命じたりはしない。

僕の目の前で言いたいことを言い、したいことをして教えを待つようにするがよい。ただし、校長のいない所では言動をつつしんで欲しい。

二、善悪をわきまえ、正直に仲よく

ケンカをする場合は、十分善悪の判断をしなさい。そして、悪いと知ったらすぐ相手にあやまれ。相手があや

まったらすぐ許してやれ。

何よりも全校生徒が仲よくすることだ。正直に本心を打ち明けあって生活してほしい。これは、今すぐにでもできることだ。

三、賞罰を気にせず、過ちはすぐ改めよ

ほめてもらいたい、叱られたくないなどというケチな根性を持つな。善と信ずることは進んで行なって教えを待ち、悪と思うことには、誰が勧めてもこれを退けて組みしない勇気を持つこと。また、青年期は過ちを恐れず自分の決めたことを実行してみること。実行のあとで過ちと悟ったら、すぐ改めることを恐れるな。若者にはやり直しする時間の余裕があるのだ。

この三つのことを生徒総会、職員会議、親の会でくり返し訴えました。そんな時の定一は、いろいろな事例や教訓、ことわざを引用して熱っぽく語りかけ、その名演説は、聞く人の心を打ち、時のたつのを忘れさせるほどでした。

こうして定一は、着々と自分のめざす教育を実践していきました。

まず第一に、生徒にひとり残らず運動競技を一種目、好きなものを選んで毎日一定時間練習させることにしました。今まで暴れまわっていたエネルギーを運動に注ぐことにしたのです。

第二は、生徒自治会の結成でした。毎月生徒総会を開かせ、校外生活の反省や学習生活の向

上を図るための自由論議をさせ実践事項をとり決めさせました。生徒は、自分たちだけで決めたことを全面的に守っていきました。映画館街や夜の盛り場をうろつく生徒は、目に見えて少なくなっていきました。

第三は、勤労作業を始めたことでした。校内グラウンドの整備など、生徒の手でできることは生徒の作業ですることにし、県の許可を得て、勤労作業訓練として課外授業をしました。教師が測量、製図。下級生が砂利集め、砂運び。上級生はセメント混合作業。当時は、物を運ぶ用具はモッコが唯一のものでした。竹を編んで作るモッコ作りや修理には、年配の教師が手を貸しました。この勤労作業訓練により、昭和四年（一九二九年）十月には、半年がかりで二十五メートルプールを完成させました。

第四に「親の会」の結成と寄付金の募集に力を注ぎました。定一は、郡内五島をくまなく回って「親の会」を結成しました。また、学校の施設や環境を整えるため、寄付金を募りました。この寄付金が呼び水となって、図書室と柔道場ができました。その柔道場に、日本柔道界で、四天王とうたわれた、同じ徳之島町出身の徳三宝がみえて部員をはげまし、部員に段級位を与え、みんなを喜ばせました。

図書室の充実につれて、生徒の学習意欲は年々高まりをみせ、学力は目に見えて向上しました。当時、合格が難しいといわれていた公立の高等学校（現在の国立大学）への合格者が続出

しました。また、九州中学校水泳大会で大島中学校が優勝したり、二人のオリンピック水泳選手が出現したのもこの頃でした。

龍野のおやじ

龍野式訓練法は、いつも教師が生徒に同列に立つことでした。冬休みの剣道部の寒げいこには、定一も防具を着けて竹刀（しない）を振りました。暴れん坊で手に負えない生徒を三週間、校長室に通わせ、共に座禅（ざぜん）を組み、書を読み、説き聞かせ立ち直らせたこともありました。

島々から、よその学校で退学させられた生徒が大島中学校へ転入することが多くなりました。この生徒たちを、校外寄宿舎（校外の寮）に入れて規則正しい日課で学習訓練をしました。週末には、校長自ら夕食時に寄宿舎を訪れ、「腹いっぱい食べているか。」と聞くのでした。

このような教えを受けた生徒たちは、誰いうとなく定一を「龍野のおやじ」と言い出し、やがて、当時の卒業生みんなが「龍野のおやじ」と親しみをこめて呼び合うようになりました。そして、「東の小原国芳（本県出身）、西の龍野定一」と言われ、その名は全国になりひびきました。

学校修繕屋

大島中学校を更生させた定一は、福山中学校（鹿児島県）、さらに私立の中野中学校、東亜中学校（共に東京）と転任し、昭和十五年（一九四〇年）、東京都立竹之台高等学校創立時の校長に就任、持論の「厳訓無処罰」の学園を造りあげました。評論家の中には、定一のことを「学校修繕屋」と呼ぶ人もいて、その教育実践を高く評価しました。

定一は、好んで「貫堂」の雅号を使いました。論語の「わが道一をもって貫く」の教えの通り、生涯を教育一筋にささげました。そして、昭和六十一年（一九八六年）一月二十九日、九十七歳でその多彩な人生の幕を閉じました。

教え子たちは、いつまでも「龍野のおやじ」の愛称をたてまつって遺訓を守っています。

執筆者　名城秀時